平成二十六年十月一日 発行
昭和二十二年一月二十四日（第三種郵便物認可）
明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行

ときのこえ Good News for Japan

味わってみませんか？

徳永幸次郎

わたしたちは、おいしい物を食べると、気持ちも豊かにされ、幸せになります。

わたしは、これまでいろいろな所に住みましたが、それぞれの土地でおいしい物と出合いました。高知では、かつおのたたきの一切れが普通の刺身の約三倍の大きさであることと、その旨味に驚きました。長野では、見渡す限りのリンゴ畑の光景に感動し、そのもぎたてのリンゴのおいしさを知りました。九州の実家に長野のリンゴを送ったら、あまりのおいしさにひと言、「今までのリンゴはなんだったのだろう」と言われました。北海道でも、数々のおいしい物に出合いましたが、その中でも牧場のしぼりたてのミルク、畑から収穫したばかりの野菜やとうもろこしは格別でした。おいしい物を味わうと、何とも言えない幸せな感じがします。皆さんもおいしい物を食べた時に、ただ、おいしいだけでなく、気持ちが豊かになり、幸せになった経験はありませんか？

「味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。」

（詩編34編9節）

聖書は、本当においしい物―主の恵み深さ―を味わう時、幸せであると示しています。

「味わう」とは、経験によって知ること、食べてわかる味覚を表しています。わたしたちは、おいしい物を味わうことによって幸せになるように、主イエス・キリストの恵み深さを味わう時に幸せになります。

歴史的な事実として、主イエス・キリストは、二千年前に十字架にかけられました。この十字架こそ、わたしたち一人ひとりに神様の溢れる恵みを与えるためのものでした。全く罪のない、神様の御子イエス・キリストが、十字架の死によってわたしたちの罪の身代わりとなってくださったからです。神様は、十字架によって、罪を赦し、信じる者を神の子とし、永遠の命を与えてくださいます。

神様は、イエス・キリストによる恵みを一方的に与えてくださっています。イエス・キリストを救い主として信じる時、わたしたちは、その恵みを味わうことができるのです。神様の子とされ、天国に国籍をもち、何が起こっても大丈夫な者とされる、という豊かな恵みを。

あるホスピス病棟の患者さんが、隣の教会の十字架を見て、信仰をもちたいと願われました。この方は病床でイエス・キリストを信じ、その恵みを味わって、数日後、実に安らかに天国へ帰られました。教会でおこなわれた葬儀で、この方のご主人は、

「妻は、最後に信仰をもって天国に行けて、本当に良かった」

と語られました。

誰もが幸せになりたいと願います。少しでも幸せな気持ちで過ごしたい、と。本当の幸せ―何が起こっても大丈夫と思えるような幸せを、主イエス・キリストは与えてくださいます。

あなたも、この幸せを味わってみませんか？ 「本当においしいもの」を味わう時に、感動と幸せが押し寄せてくるでしょう。

（救世軍士官〔伝道者〕）

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

〈信仰の体験談〉

神様の導きのままに

「このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」（ローマの信徒への手紙５章２～５節）

粟飯原 順・由美子

香港市街

粟飯原由美子

育った環境

私は、ある新興宗教の熱心な信者の両親の下に、三人きょうだいの真ん中、長女として生まれました。私が七歳の時、父を交通事故で亡くしました。そのためか、幼い時から「死」に対する恐れがあり、〈自分は死んだらどこに行くのだろう？　自分という存在がなくなってしまうことがあるのだろうか？〉と、いろいろ思い巡らしていました。

未亡人となった母は、私たち子どもを連れて、祖母の所に移りました。以後、母は一家の大黒柱となり、祖母が私たち三人を育ててくれました。

母の信仰は続きましたが、私は次第にそれに反発し、会合に誘われるたび、〈そんなところへ行っても何の意味もない〉と拒否するようになりました。もちろん、キリスト教については全く無知で、神様なんかいない、と思っていました。自分が良い事をすればきっと報われる、と思っていました。その一方、心の中には、「真実」が知りたいという思いもありました。「死」に関しては何の答えももっていませんでした。

中学に進学してから、私を変えたのは英語でした。一九七〇年の大阪万博に、小学六年の卒業記念と中学一年の春の遠足で行き、〈世界中の人々と話し、交流できるようになりたい、行ったことのない国々に行ってみたい〉という強い思いが与えられたのです。そして、英語を学ぶためにアメリカに留学するという夢をもちました。しかし、母子家庭に育った私は、そのような夢は自分が働いてお金を貯めて叶えるものだと思い、高校卒業後、三年働いてから、アメリカに行きました。

新しい生活

アメリカには、一九七九年四月から一九九二年の九月まで十三年数カ月住みました。その間、結婚をし、離婚をし……、いろいろなことがありましたが、特記すべきことは、イエス様を救い主として受け入れ、クリスチャンになったことです。前夫に勧められて参加したバイブルスタディ（聖書研究会）がきっかけでした。普通なら、興味もないので断ったはずですが、その時に限って、行ってみようと思いました。

〈聖書研究ってどういうものか、見てきてやろうじゃないの〉という傲慢な思いからでした。

そのような思いで参加したバイブルスタディで、神様は私の心に触れてくださいました。日常英会話には不自由がなかった私ですが、聖書に関する英語はよくわかりませんでした。それなのに、学びの最中に体中が熱くなり、涙が出て止まらなくなったのです。バイブルスタディのリーダーは、その場で、自分中心の生き方を悔い改める祈りへと導いてくださいました。

そのお祈りをしてから、聖書に何が書かれているのか無性に知りたくなりました。そして、開いた聖書の最初に書かれていた言葉が

「初めに、神は天地を創造された」（創世記１章１節）

でした。〈そうだったのか。神様はいたんだ。〉その時の感動は、今でも忘れません。神様は、命を支配され、御子イエス・キリストの贖いによって私たちの罪を赦し、死を打ち破り、信じる人に永遠の命を与えてくださる――ずっと抱えてきた「死への恐れ」が消えました。

帰国～新天地で

しかし、数年後、日本に帰国した当時の私は、神様から離れて世俗的な生活を送るようになっていました。帰国してからすぐに仕事を探し、働き始めました。しばらくして、出張で香港に行く機会がありました。アメリカにはない、アジアのエネルギーを感じ、香港が好きになりました。やがて、毎月のように香港に出張するようになり、一九九六年、駐在員として香港で生活することになりました。

香港に住むようになったある日、神様から

「教会に戻りなさい」

と声をかけられたように感じました。すぐ、教会に行き、もう一度、クリスチャンとしての生活をするようになりました。

そうなると、気にかかるのは日本にいる母のことでした。〈一日も早く本当の神様を知り、信じてほしい〉と強く願わされ、機会があるたび、プレゼントや聖書の言葉が入ったカードを送り、イエス様の愛を伝えました。神様は私の祈りを聞いてくださり、母は、一九九九年にイエス・キリストの救いを信じて、クリスチャンになりました。

その後、順と出会い、二〇〇七年に結婚しました。共に祈る家族が与えられ、心から感謝しています。

成功と挫折

粟飯原 順

私はクリスチャンの家庭に生まれましたが、子ども心に教会は退屈だと思い、いつからか通わなくなりました。社会人になってからは、人間は努力で成功できる、と考え、仕事に没頭し、常にこの世での成功を求めて生活していました。

一九九三年に香港に生活の場を移し、順風満帆な日日が続くと思っていました。しかし、息子の教育問題など、考え方の違いから、すれ違いが多くなり、前妻と別れることになってしまいました。息子は私が引き取りました。非常な悲しみがあり、このような結果になったことに、自分の無力さをいやというほど思い知らされました。

クリスチャンとなって

その後、息子が歩いて学校に通える家を探そうと、不動産屋を訪ねました。そこで、営業の女性から聖書をいただき、教会に行くよう勧められました。それがきっかけで教会に通うようになり、二年間の求道を経て、二〇〇三年一月二十六日に、神の御子イエス・キリストを救い主と信じてクリスチャンになりました。寒い中、プールで洗礼を受けたことを、喜びと共に鮮明に覚えています。

このように、クリスチャンとなって大きな感動があったにもかかわらず、その後は、子育てと仕事に追われ、クリスチャンらしいことは日曜に礼拝に行くだけ、という毎日になってしまいました。

生活が落ち着いた頃、将来的に、再婚のことも考えるようになり、信仰がしっかりしたクリスチャンの女性と結婚したいと願うようになりました。そんな時、親しい宣教師夫妻から、ある日本人女性の信仰の体験談を聞く機会がありました。とても感動し、〈そのようなすばらしい女性と結婚できたらなあ〉と強く思わされました。

数年が経ち、そのことをすっかり忘れていた頃、私がメンバーになっていたポップス音楽のバンドがコンサートをおこなうことになり、雑誌社から取材依頼がありました。その時、打ち合わせのためにメールをくれたのが、編集者であった由美子だったのです。ほどなく、宣教師夫妻が話していた女性その人であることがわかりました。その後の交際を通して、これはきっと神様のお導きに違いないと思うようになりました。由美子も同じ思いを与えられていたようで、結婚することとなりました。

転機

信仰を共にする伴侶を得て、念願のクリスチャンホームを築き、日曜日に教会に通うことが楽しみでした。聖歌隊に加わったり、教会の様々な奉仕に参加したりしていました。しかし、それは基本的に、日曜日に限定されていました。週日は相変わらず仕事や趣味に時間を割いていました。やがて、だんだん、〈これでいいのだろうか〉という気持ちが大きくなっていきました。〈自分たちだけが救われて、それで満足している。イエス・キリストのすばらしい救いを多くの人に伝えなくていいのか〉と思うようになったのです。

そんな時、仕事のパートナーと営業方針で対立し、窮地に立たされてしまいました。毎日、必死で祈りました。そして、祈りの中で「すべての問題が解決して、二〇一〇年十一月三十日までにパートナー関係を平和に解消できるなら、私の残りの人生を神様にお献げします」と、約束したのです。十二月からは、すべて神様がお導きになることだけをおこなう、と決めていました。すると、それまでの状況から、以前どう考えても不可能だった多くの問題が解決されていきました。そして、パートナーから、十一月三十日に辞めてよい、との承諾を得ることができたのです。

それぞれの母と

仕事のことが落ち着くと、私は、神様は私にどうしてほしいと思っておられるのだろう、と熱心に求めるようになりました。「神様に献げる人生」とは、どのようなことだろう、と考えながら、教会の中の働きをさせていただいていました。

再出発

そのような中、起こったのが東日本大震災でした。宣教師と共に、二回、被災地を訪ね、ボランティア活動をおこないました。そのことを通し、助けを必要とする人々のために働かせていただきたい、との思いを強くもつようになりました。それを機に、三十年間、毎日のようにたしなんでいたお酒をやめ、テレビ、映画、ジャズバンドなどの楽しみを一つずつ手放していきました。

何より大きな変化は、日本に帰る決心をしたことです。何度か日本に里帰りをした際、母の亡き叔母や母が所属している救世軍の伝道者と話し、パンフレットを見る機会がありました。そして、救世軍の働きこそ、私たちが望んだものであることを確信したのです。

長年生活した香港を離れるということは、これまで築いてきた一切を捨てる、ということです。しかし、もし、必要なものがあれば、それら以上のものを与え、万事を益としてくださる神様がおられます。その神様により頼む歩みに、希望をもつことができました。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」（ローマの信徒への手紙8章28節）という御言葉に大変、励まされました。

杉並小隊にて

日本に帰る前に、一年間、夫婦二人で、聖書の学びや、キリスト教の教義、クリスチャンの生き方などを学び、これからの働きに備える時をもちました。

神様の導きのままに

今年の四月、私たち夫婦は日本に帰ってきました。現在、それぞれ、救世軍の施設と本部での働きに就いています。香港での働きとは全く違うものですが、この場所で神様が用意しておられるすばらしいお恵みを期待して、毎日、感謝の日日を送っております。

（杉並小隊（教会）所属）

キリトリ

ご氏名

ご住所

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。

創立者　ウイリアム・ブース　大将　アンドレ・コックス（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　勝地　次郎（救世軍本営　東京都千代田区）　http://www.salvationarmy.or.jp

WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

〈アメリカ〉カリフォルニア北部地震救援活動

8 月 24 日午前 3 時 20 分頃（日本時間 19 時 20 分）、カリフォルニア北部で、マグニチュード 6.0 の地震が発生しました。

大規模な停電、60 カ所の水道管破裂や、観光地ナパバレーでは、19 世紀に建てられた歴史的建造物等が損壊する被害となりました。

救世軍は早速、食料、避難用シェルター、飲料水と共に、心のケアーを提供しました。ガスが不通となり、調理ができない地域には、キャンティーンカー（移動給食車）が出動。最も被害の深刻なナパと、バレイオウ地区、公的な避難所に赴きました。消防署においては、支援活動をおこなっている人々に数百の食料を提供し、ナパバレーにあるセントヘレナ病院では、断水していたため、患者・スタッフに食料と飲料を提供しました。また、2 カ所の移動住宅街（公園）において、毎日 800 食を住民に提供しています（8月 26日現在）。

〈日本〉

●広島県における大規模土砂災害被災地支援

8 月 20 日（水）、広島市北部で午前 2 時過ぎから 1 時間に 100ミリを超える猛烈な雨が降り、広い範囲で、土石流、土砂崩れが発生しました。平年の 8 月 1カ月分を上回る雨量に被害は甚大となり、9 月 9日現在、死者 73人、行方不明者 2人、重軽傷者 44人に上っています（広島県災害対策本部発表）。

救世軍では、地元の小隊（教会にあたる）が、20 日午前中に広島市災害対策本部と連絡を取り、午後から安佐南区緑井、八木地区を訪問し、被災状況を確認しました。21 日には、広島宣教協力会（市内のキリスト教教職者からなる会）の話し合いに参加し、23 日、自治体のボランティアセンター、災害対策室に、土砂清掃用の土嚢袋を 250 枚提供しました。また、安佐南区の災害ボランティアセンターから緊急の要請があり、スコップを提供。その他、ボランティアのための飲料、米 30 kgも手配しました。26 日より、広島宣教協力会が中心となって開設されたボランティア室が具体的な活動を開始し、被災した広島平和キリスト教会（日本バプテスト同盟）の近隣を中心に、土砂撤去作業を展開しました。日に日に状況が変化する中、泥出しや拭き掃除等のニーズが高まっています。

9 月に入り、ようやくボランティアの入り始めた安佐北区可部東地区にて、土砂の撤去作業が開始されました。救世軍より、広島宣教協力会に高圧洗浄機 7 台を提供し、8 日には、同地区の町内会より要請を受けて、ボランティアの人々が使用するための仮設トイレを設置しました。

●兵庫県における土砂災害被災地支援

西日本の土砂災害は広域にわたり、8 月 16、17 日の大雨では、兵庫県丹波市・川西市でも、死者の出る被害となりました。発生当時 80 人近くが避難していた丹波地区の避難所に、救世軍の神戸小隊から、慰問品を届けました。

ＪＳＢ ジャパン・スタッフ・バンド オータムコンサート

プリティッシュスタイルのブラスバンドです。輝かしい、聖なる響きをお楽しみください。

11月2日（日）
午後３時
山室軍平記念ホール
（東京メトロ、都営地下鉄神保町下車。A6 出口すぐ）
入場無料

過去に学び、現在を見据え、未来にはばたく救世軍 120◌150

来年2015年は、救世軍創立150年、日本で救世軍の活動が開始されて120 年の記念の年です

日本では…120周年記念行事を開催

2015 年 5 月 3日（日）～5日（火）
救世軍を学ぶセミナー（仮称）

2015 年 9 月 20日（日）～22日（火）
全国青年大会

イギリス・ロンドンでは……創立 150 周年万国大会を開催

2015 年 7 月 1日（水）～ 5日（日）

テーマ　全世界を贖う限りない恵み

会場のザ・O２（ロンドン）

救世軍とは

The Salvation Army

プロテスタントのキリスト教会で、世界百二十六の国と地域で活動しています。

創立者はイギリスのメソジスト教会牧師だったウイリアム・ブース。一八六五年、ロンドンの貧しい人々、社会から顧みられない人々の物心両面からの救いを目指し、働きを始めました。

その創立の精神は時代を超えて受け継がれ、今日も、軍隊流組織の機動力を生かして、助けを必要としている人々のニーズに応えながら、神の愛を伝えています。

救世軍の信徒は、創立時よりアルコール依存症者の回復支援の働きをしているため、アルコール抜きのライフスタイルをとっています。またブラスバンドが盛んで、オルガンやピアノとともに礼拝の中で奏楽の役割を担ったり、屋外での集会などで用いられたりしています。

日本での働きは、一八九五（明治28）年に始まりました。その当初から、刑を終えて出てきた人々の保護や、職業訓練、災害被災者支援、廃娼運動の推進、結核療養所の設立、子どもの保護など、社会福祉史に先駆者としてその足跡を残しました。

現在は、四十五の小隊（教会にあたる）と十二の分隊（伝道所にあたる）、二十の社会福祉施設、二つの病院（ホスピス併設）を通して働きを進めるとともに、街頭生活者支援や災害被災者支援など、様々な社会奉仕活動をおこなっています。

発行日及び定価
▼発行日　毎月一日・十五日
▼定　価
一日号一部五〇円（〒六二円）
十五日号一部六〇円（〒六二円）
クリスマス特集号（十二月一日号）
一部一〇〇円（〒七〇円）
一年分　一三七〇円＋郵送料七五二円
振替・〇〇一八〇―五―四四〇〇
発行兼印刷人　救世軍　代表者　勝地　次郎
編集人　齋藤　惠子
〒101―0051　東京都千代田区　神田神保町二ノ十七
電話　東京（03）三三七―〇八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　図書印刷株式会社

（取扱支部）

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

（この欄に通信文を書くと第三種扱いになりません）